



Title	ブラジルモダニズム文学：サンパウロと移民
Author(s)	平田, 恵津子
Citation	ブラジル研究. 2007, 2, p. 33-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98385
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ブラジルモダニズム文学

— サンパウロと移民 —

平田 惠津子

はじめに

ブラジル文学史上、「もっとも肥沃な時代の幕開け」¹(Cândido 1999: 69)となったモダニズムは、19世紀末から20世紀初頭にかけて大きく変動する国の政治・経済・社会の転換期を生きた若い詩人・作家たちが、新しい世の中を、新しい時代にふさわしい手法で描き出したいという熱望にかられ、美術・音楽界を巻き込んで展開した運動の成果であった。とりわけ初期のモダニストたちは「ヒーロー的」とも称される破壊的、攻撃的な態度で、当時芸術界を支配していた保守的でエリート主義的なアカデミズムに真っ向から挑み、既成の価値観を否定した。彼らにとって、科学技術の進歩がもたらした機械文明—高層ビル、アスファルト、飛行機、自動車、電話、映画などに象徴されるスピードとダイナミズムの時代—を旧態依然としたやり方で表現することはもはや不可能だったのである。文学批評家マリオ・ダ・シルヴァ・ブリット(Mário da Silva Brito)は、当時の文学界における新旧の美学のせめぎあいについて「自動車がペガサスをひく」と評している(Brito: 24)。モダニズムの美学を生み出した近代文明を象徴する「不恰好な」自動車がはねとばすギリシャ神話の「美しい」神馬ペガサスは、当時文壇で主流だった高踏派(パルナシアン)をたとえたものである。モダニズムの若い詩人たちがもっ

とも激しく攻撃したのは、世界が大きく変わろうとしているなか、ブラジル文学アカデミー(Academia Brasileira de Letras)という象牙の塔にたてこもって芸術至上主義を唱える高踏派の詩人たちであった²。

本論文は、ブラジルのモダニズム文学に焦点をあて、ふたつの観点—サンパウロという場所、移民という社会グループ—から照射することを目的としている。しばしば「サンパウロの」と冠されるブラジルのモダニズム運動がとりわけその初期、サンパウロ市を中心舞台として展開したこと、サンパウロ市の急速な近代化、都市化、工業化を支えていた大きな力が海外からの移住者であり、彼らの存在がサンパウロ市の日常風景にとどまらず、住民の生活スタイルや考え方にまで変化を及ぼしていたことに十分な注目をせずに、ブラジルのモダニズム文学を理解することは難しいであろう。そこでまず第1章において、ブラジルのモダニズム運動の流れを概観しつつ、サンパウロ市と移民との関係性を浮かび上がらせ、つづく第2章でいくつかの代表的な作品をとりあげ、そこに描き出されている移民の表象について考察を加えてみたい。

第1章 サンパウロと移民とモダニズム

(1) ヨーロッパ前衛芸術とブラジルモダニズム

20世紀初頭のブラジルで、芸術の革新をめざしていた作家や知識人の主張や活動の指針となったのは、ヨーロッパで展開していた前衛芸術運動であった。なかでも未来派、キュビズム、表現主義、ダダ、シュルレアリスムは、新しい表現形式を模索していたブラジルの詩人や美術家、音楽家たちに大きな刺激と影響を与えた。

文学の分野においては、1912年、滞在先のヨーロッパから未来派の思想を持ち帰った詩人オズワルド・デ・アンドラーデ(Oswald de Andrade, 1890-1953)が前衛芸術のブラジルへの「最初の輸入業者」(Brito: 25) だと言

われる。そして、5年後、この詩人がマリオ・デ・アンドラーデ (Mário de Andrade, 1893-1945) と出会い親交を結ぶことによってモダニズム運動は加速していくことになる。直観的で大胆、外向的なオズワルド³と、その反対に思索家で内向的なマリオの出会いが、運動に思想的枠組みと機動力をもたらすのである。ふたりのアンドラーデは互いに刺激しあいながら運動を主導し、同時に、数々の重要な作品を生み出していく。

1910年代以降、個人的レベルで実験的に行なわれていた新しい創作の試みは、ブラジル芸術の革新を求めて組織化された力強い動きとなり、1922年2月、サンパウロ市立劇場における「近代芸術週間 (A Semana de Arte Moderna)」の開催へとつながる。この期間、市立劇場のロビーにはヨーロッパ帰りの若い芸術家の絵画や彫刻が展示され、舞台では新しい文学についての講演やピアノの演奏、詩の朗読などが行なわれた。オズワルドやマリオが中心となって推進したこの文化イベントは、途中から聴衆のやじと怒号が乱れ飛ぶ騒動となり、新聞各紙で大きくとりあげられる。その騒ぎに保守主義者たちは若い芸術家たちを「一時的な流行に飛びつき真の芸術を理解していない」⁴と断罪したり、無視したりしているわけにはいなくなる。新聞・雑誌を舞台にふたつのグループのあいだで激しい論争が繰り広げられ、結果として、新しい芸術を模索する若者たちにより明確な方向づけをうながし、モダニズム文学と芸術を広く国内に知らしめることになるのである。

(2) サンパウロ市とモダニズム運動

「近代芸術週間」がサンパウロ市で開催されたこと、またオズワルドとマリオをはじめ、そこに参加した芸術家たちの多くがサンパウロ市、またはサンパウロ州出身の若者であったことは偶然ではない。19世紀末からコーヒー産業の繁栄を背景に急速な近代化が進んでいたサンパウロの町の活況、熱っぽい興奮、未来へ向けて絶え間なく続く発展への期待は、伝統的な美学を否定し、近代化がもたらした機械文明、高層ビルが立ち並ぶ都会の感覚を重

視するモダニズム文学と芸術が花を咲かせるのに最良の空気と土壌を提供していたのである。

19世紀の半ば頃まではのどかな田舎町に過ぎなかったサンパウロの進歩にはめざましいものがあった⁵。歴史家ボリス・ファウスト(Boris Fausto)は、1889年、帝政から共和制へと移行してからの40年間に起きたブラジルの主な社会的経済的変化のひとつとして、すべての町が都市化したことをあげているが、なかでも驚異的な発展をとげたのがサンパウロ州の州都であったと指摘している (Fausto: 284)。1890年から1900年までの10年間にサンパウロ市の人口は6万5千から一気に24万へと増加し、ブラジル第2の都市となる。その数は69万の人口をかかえていた当時の首都リオ・デ・ジャネイロには遠く及ばないが、州内で生産されるコーヒーの輸出が生み出す利益をもとに都市化、工業化が進み、雇用が拡大していたサンパウロ市の人口増加率は首都のそれを上回っていた。サンパウロ市の発展は日進月歩の勢いだったのである。

サンパウロでモダニズム運動を展開させることになった要因のひとつとして、ほかにも、コーヒー貴族と呼ばれるサンパウロの地主階級の存在を指摘すべきであろう。サンパウロ市中心部に豪邸を構えた彼らは、その財力でヨーロッパの美術品—そのなかには前衛芸術の作品も数多く含まれていた—を買い求め、ヨーロッパから詩人や画家を招待した。それは、間接的に、ブラジルの人々にヨーロッパの新しい芸術を紹介することになった。また、ブラジルの若い芸術家たちに奨学金を支給してヨーロッパで学ぶ機会を与えたり、「近代芸術週間」が市立劇場で開催されるための資金を提供したりして、モダニズム運動の広がりを経済面で支えたのも、主にそれらのコーヒー貴族であった。なかでも重要な役割を果たしたのはパウロ・プラド(Paulo Prado: 1869-1943)である。サンパウロの由緒ある家柄に生まれ、20代の約7年間にパリの社交界で過ごしたプラドは、知性と教養を兼ね備え、芸術に対する高い関心と洗練された趣味を持つ知識人で、オズワルドやマリオと親しく交わり、彼ら若いモダニストたちの活動を精神、物質両面において支えた。1

1922年に開催された「近代芸術週間」にも積極的にに関わり、1924年にはスイス生まれのフランスの前衛詩人ブレイズ・サンドラール(Blaise Cendrars: 1887-1961)をブラジルに招待し、若い詩人や画家に大きな刺激を与えることになった。

このフランスの詩人は、ブラジル滞在中に起きた出来事や印象を数多く書き残している。それらの文章⁶は、ヨーロッパ人の視点から、当時のブラジル、とりわけサンパウロ市の様子、ブラジル文学界の動向や若いモダニストたちの言動を伝える興味深いもので、若干長くなるが、以下にその一部を引用したい。

ああ！サンパウロの若者たちときたら、彼らは私を笑わせてくれ、そして私は彼らが大好きだった。疑いの余地なく彼らは大げさだった。ボードレーとホイットマンとパリの詩人たちのあとに、ようやくサンパウロ人は自分たちの近代性を発見したところだったのだ。そして彼らはそれを独占していた。そしてそれを切り拓いていた。彼らはすべての記録を達成しがっていた。だってその小さな田舎町では1時間に1軒の家が、1日に1本の高層ビルが建てられていなかっただろうか？サンパウロは中心地に、大都会になろうとしていた。彼らは自分たちの詩が鉄の足場を作っていた機械の韻律でつき進むことを望んでいた。何と美しいその興奮。しかし、その一方で、私の友人たちは耐えがたい連中だった。なぜなら実際のところ、サンパウロの作家、ジャーナリスト、詩人たちはひとつのサークルをつくって、パリ、ニューヨーク、ベルリン、ローマ、モスクワで行なわれていたことを遠くから猿まねしていたのだから。ヨーロッパを忌み嫌っていたが、自分たちの詩のモデルなしに一時（いつか）たりとも生きてはいられなかった。それをやたら知りたがっていた。その証拠に私を招待したではないか。（Cendrars: 96）

このサンドラールの文章は、近代化にわきたつサンパウロ市と若い詩人た

ちの興奮を伝えると同時に、ブラジル文学のヨーロッパ文学に対する絶ちがたい依存性を示している。1930年代に入って、頭角を現してくるブラジル北東部の作家たちが、モダニズムはサンパウロのもので、それはヨーロッパ文学の物まねに過ぎないと激しく批判したことをここで付け加えておきたい。

(3) サンパウロの移民とモダニストたち

サンパウロの若いモダニストたちに刺激を与えたのは、ヨーロッパの芸術家ばかりではなかった。19世紀後半、ヨーロッパからブラジル南東部、南部に大量に移り住み、町の風景、住民の生活スタイル、習慣、考え方まで変えていた移民の存在を間近にして、詩人や作家たちは大いにインスピレーションをかきたてられたのである。

ブラジルでは1850年に奴隷貿易が禁止されてから、1888年に奴隷制が廃止されるまで、段階的に奴隷解放が進んでいくが、それと並行して、奴隷に代わる労働力としてヨーロッパから多数の移民が導入された。これらの移民は主にサンパウロ州内陸部のコーヒー農園で働くことを目的として受け入れられたが、厳しい労働条件から農園を出て、都市部に移り住む者も少なくはなかった。特に工業化が急速に進んでいたサンパウロ市では工場で働く労働力を数多く必要としていたので、そこへよりよい労働条件を求めてヨーロッパ移民が入っていったのである。アメリカの歴史家リチャード・M・モースは不完全な資料であると制限をつけながらも、19世紀末から20世紀初頭、サンパウロ市の工場労働者全体に占める移民の割合が75～85%であったとするバンデイル・ジュニオールの統計を引用している(Morse: 238)。

ヨーロッパ移民のなかでもとりわけ数が多かったのはイタリアからの移民で、ボリス・ファウストは1887年から1930年までにブラジルへ渡った380万人の移民のうち、約35%がイタリア人で、その7割がサンパウロ州に移住し、その総人口の9%を占めていたと記している(Bosi: 275-281)。

イタリア人に次いで多かったのがポルトガル人とスペイン人で、日本人はヨーロッパ移民の到着から遅れて1908年にブラジルへの移住を開始した。非ヨーロッパ人の移民としては、ほかにシリア・レバノン人やユダヤ人の存在も無視することはできない。

近代的な都市へとめざましい変貌をとげようとしていたサンパウロ市の経済を支えていたのはこれらの移民であった。リオ・デ・ジャネイロ出身の外交官で「近代芸術週間」に参加した詩人でもあるロナルド・デ・カルヴァーリョ(Ronald de Carvalho: 1893-1935)は、リオ・デ・ジャネイロやサンパウロなどの町に移民の波が押し寄せ、その様相を一変させるのを目の当たりにして、興奮気味にこう書いている。

ブラジル人はもはや三つの人種—インディオ、アフリカ人、ポルトガル人—の独占的な混血ではない。イタリア人、ドイツ人、スラブ人、サクソン人が我々の経済に機械をもたらした。ブラジルは工業化した。特に南部のリオ、サンパウロ、つまりヨーロッパ移民の最も重要な拠点において。そうして生活はよりアクティブで、めまいがしそうなほどよりスピーディーで、より国際的になり、あまり保守的ではなくなった。より強靱な血が流れる新しい民族は、我々の先人が征服したものの支配できなかった壮大な空間に打ち勝つだろう。そうして、我々に救いようのない定説の宿命を背負わせていた思い上がった人文地理学の軽率な命題を否定してくれるだろう。(Carvalho: 368)

カルヴァーリョは、新しいヨーロッパ人の血が入ることで強化されたブラジル人が熱帯の厳しい自然に打ち勝ち、そこに文明国を築き上げるであろうことを期待している。彼の移民に対する視線は排他的なものではなく、むしろ、活力あふれる新しいブラジル民族をつくりだすために積極的に受け入れようとするものである。ここでカルヴァーリョが言う「移民」とはヨーロッパ人に限られ、シリア・レバノン人や日本人について言及されていないが、

上述したように19世紀末から20世紀前半、ブラジルへ移住したのは圧倒的にヨーロッパからの移民が多かったこと、工場労働者などとして都市で暮らす移民の大部分がイタリア、ポルトガル、スペインからの移民であったこと、一方で、日本移民のほとんどはサンパウロの内陸部でコーヒー栽培に従事したこと、シリア・レバノン人は主に都市部で暮らしたが、独立した小規模の商いを行なうのが一般的であったことなどの事実を考えると、リオ出身のカルヴァーリョの興奮の根底に必ずしも非ヨーロッパ人を差別しようとする（無）意識があったとは言えまい。

第2章 サンパウロのモダニズム小説と移民

（1）モダニズム小説に描かれた移民

サンパウロを舞台に書かれたモダニズム小説について、移民を抜きにして語ることは難しい。特にオズワルドが「パウ・ブラジル宣言」(“Manifesto Pau-Brasil”)⁷を発表した1924年頃から、ナショナリズムが多く作家の創作意欲をかきたて、作品をとおしてブラジルの文化的、民族的アイデンティティーが模索されるようになっていくなかで、移民は「我々ブラジル人」を映し出す鏡の役割を果たす他者として、あるいは、ブラジル社会に浸透していき、現地人と合体、新しいブラジル民族をつくる新参者として描き出された。前者の代表的な例としてマリオ・デ・アンドラーデの『愛するという自動詞』(*Amar, verbo intransitive*, 1927)と『マクナイマー特性/徳性のないヒーロー』(*Macunaíma – herói sem nenhum caráter*, 1928)を、後者のそれとしてアントニオ・デ・アルカンタラ・マシャード(Antônio de Alcântara Machado: 1901-1935)の『ブラス、ビシーガ、バーラ・フンダーサンパウロ市の記事』(*Brás, Bexiga, Barra Funda: Notícias de São Paulo*, 1927)を挙げることができるであろう。紙幅の関係でこれらの作品をすべて詳細に分析することはできないので、マリオ

の2作品についてはその概要を述べるにとどめ、本論文ではアルカンタラ・マシャードの作品により重点をおいて考察してみたい。

マリオ・デ・アンドラーデの小説『愛するという自動詞』では、サンパウロ市内に織物工場をもつ裕福なソウザ・コスタ家を舞台にして、一家の子供たちにドイツ語とピアノを教えるという表向きの理由で雇われたドイツ人女性エルザが、主人に請われ16歳の長男カルロスに性の手ほどきをするという話が展開する。当時精神分析学に強い関心を持ち、フロイトの著作など関連文献を渉猟していた作家は、思春期のカルロスの心の動きを丁寧に追い、その成長の過程を描き出す一方で、表面だけとりつくろった愛のない夫婦生活を送るカルロスの両親の偽りに満ちた日常を描き出すことで、サンパウロ市の典型的なブルジョア階級を皮肉っている。この家には下働きをするタナカという無口な日本人も雇われていて、話の展開にはほとんど関与しないものの、ドイツ人のエルザとともに、愚鈍で浅はかで偽善的なブラジル人を浮かび上がらせる他者として描かれている。作家は、三人称の語り手に、優れた民族であるドイツ人と日本人がいずれブラジルの土地を支配するであろうように、エルザとタナカもソウザ・コスタ一家を手中に収めようと虎視眈々と機会を狙っていると語らせている。語り手のこの懸念は、サンパウロ州の農地の30%が外国人の所有地で、その数値にはブラジルで生まれ、ブラジル国籍をもつ移民の子孫は含まれていないという1934年に実施された統計結果（Fausto: 275）を考えれば、あながち荒唐無稽な絵空事とは言えないであろう。

同じくマリオ・デ・アンドラーデが書いたブラジルモダニズム文学の傑作『マクナイマ』は、アマゾンで生まれ育った主人公マクナイマの奇想天外な冒険物語である。作品のジャンルが何であるか決めかねた作家が小説ではなく「ラプソディー」と名づけたこの作品は、その名のとおり民族的、叙事的性格を強くもつものである。ただし、「我らがヒーロー」と冠されるマクナイマは、むしろアンチヒーローとよばれる方がふさわしい怠惰で好色な主人公で、このラプソディー小説は民族の英雄神話のパロディとなっている。

タパニユマ族インディオの女性から真つ黒い肌をもつ男の子として生まれたマクナイマは、ふたりの兄とともに出かけた冒険の旅の途中、魔法の水で金髪・青い目の青年に変身する。生まれ故郷のアマゾンを発ち、サンパウロ市へ向かうヒーローの目的は愛する女性が残した形見の石を取り戻すことで、それを奪ったのは彼の最大の敵ヴェンセスラウ・ピエトロ・ピエトラである。この強敵はフィレンチェ出身のペルーの行商人で、商売で成功をおさめ、サンパウロ市の目抜き通りに大邸宅を構える「ニュー・リッチ」であると同時に、インディオの神話に出てくる人食い巨人ピアイマンでもあるという二重のアイデンティティーを与えられ、同じく神話に登場するカイボラという女の化け物と結婚している。以上、簡単にまとめた人物設定から、マクナイマが先住民族インディオ、黒人、ヨーロッパ（ポルトガル）人の三つの人種の混血からなるブラジル人を、ヴェンセスラウ・ピエトロ・ピエトラが19世紀末から20世紀にかけてブラジルに渡り成功したイタリア移民を象徴していることを理解するのは難しくない。ただし、民族のステレオタイプの特徴が対照的に描かれた前作『愛するという自動詞』に比べ、この作品に登場する人物の造形と彼らの相互関係は複雑である。それはヴェンセスラウ・ピエトロ・ピエトラのアイデンティティーの二重性からも理解できるであろう。マクナイマとヴェンセスラウ・ピエトロ・ピエトラの敵対関係と後者に対する前者の勝利を、単純にブラジル人とイタリア移民の対立として読み換えることには問題がある。この点についての詳しい考察は別の機会に譲るとして、本論文ではマリオ・デ・アンドラーデにとってブラジル人は「いまだ形成途上にあり、特徴が定まらない民族」⁸であったことを指摘しておきたい。作家はそれを思春期のカルロスと、変身を繰り返すヒーロー、マクナイマに体现させ、彼らの特徴（のなさ）を映し出す他者としてエルザやタナカ、ヴェンセスラウ・ピエトロ・ピエトラを作り出したと言えよう。

(2) 『ブラス、ビシガ、バーラ・フンダーサンパウロ市の記事』

1927年、アントニオ・デ・アルカンタラ・マシャード⁹の代表作となる短編集『ブラス、ビシガ、バーラ・フンダーサンパウロ市の記事』（以後、副題を略し『ブラス、ビシガ、バーラ・フンダ』と記す）が出版された。出生証明書に登録されたアントニオ・カスティーリョ・デ・アルカンタラ・マシャード・ドリヴェイラ(Antônio Castilho de Alcântara Machado d'Oliveira)という長い本名が示すように、そのルーツは植民地時代初期までさかのぼり、代々、軍人や政治家、法律家、学者を出してきたサンパウロの由緒ある家筋の出であった。1922年、「近代芸術週間」が開催されたとき、当時のエリート子弟の常としてサンパウロの法科大学に通っていたアルカンタラ・マシャードは、友人たちと一緒に観客席から野次を飛ばす側にあつたが、後にマリオやオズワルドと交流し、モダニズム運動に参加、『テラ・ローシャとほかの土地』(Terra Roxa e outras Terras)、『人食いの雑誌』(Revista de Antropofagia)、『ノーヴァ誌』(Revista Nova)など運動の重要な機関紙と言える文芸誌の創刊と編集に関わった。ジャーナリズムは、大学時代から政治家としての道を歩み始めた矢先の34歳で亡くなるまで中断することなく作家が情熱を注いだ活動であった。

『ブラス、ビシガ、バーラ・フンダ』のタイトルとなっているのはサンパウロ市の三つの地区の名前で、そこには主に市内の工場で働く貧しいイタリア系移民が住んでいた。ここに収められている11の短編小説は、すべてこれらの移民を主人公にしたものである。

アルカンタラ・マシャードは、「社説」(“artigo de fundo”)と名づけた序文で、『ブラス、ビシガ、バーラ・フンダ』が本としてではなく新聞として生まれたこと、そこに収められている作品が短編小説としてではなく記事として生まれたこと、さらにそれがサンパウロのイタリア系ブラジル人の新聞であることを宣言している。そして、「長いあいだ、詩人が悲しいとものしった三つの人種の混血でつくられてきた民族」に新しい血を注ぎこむべく「大西洋横断船がヨーロッパから運んできた」、「歌いながらサンパウロの土地を踏んだ明るい人種」についての単なる記事であり、そこには党派性も観念性もないと続ける。さらに「記事」という言葉を繰り返し用い、ブラジル人と交わり

新しい混血人種を生み出していたイタリア移民の労働の日々、身近な生活を単に書き留めるのが目的で、コメントも議論も掘り下げもしない、すべてはさまざまな事実、都会で起きた出来事であると強調する。

作家が「社説」で主張しているように、また副題の「サンパウロ市の記事」が示すように、『ブラス、ビシガ、バーラ・フンダ』で繰り広げられるのは、サンパウロ市で生活するイタリア移民、主に貧しい人たちの悲喜こもごもの人生、彼らが引き起こす事件や日常風景の一こま一こまであり、マリオ・デ・アンドラーデの作品に見られるようなブラジル人を定義しようという意図は感じられない。そこには工場労働者、小さな商店主、床屋、サッカー選手、若いお針子たちが大声でしゃべり、言い争い、働き、子供たちが通りで騒々しく遊ぶ様子がイタリア語を交えた短い文章で生き生きとユーモアたっぷりにつづられている。文学批評家アルフレド・ボジは、アルカンタラ・マシャードの短編小説が「(そこここに象徴主義的なところはあるが) 写実的で、鋭敏な都市文学の例」であり、それはモダニズム以前にリオ・デ・ジャネイロ市郊外の「貧しく虐げられた」人々を描いた小説家リマ・バレット(Lima Barreto: 1881-1922)以来のことであるが、バレットと異なり、サンパウロの作家の作品には楽しさがあると解説している(Bosi: p.423)。

本論文で注目したいのは、「サンパウロのプログレス商店」(“Armazém Progresso de São Paulo”)と「パートナーシップ」(“Sociedade”)の2篇で、どちらもイタリア移民の社会的、経済的上昇をテーマにしたものである。

まず「サンパウロのプログレス商店」から見ていこう。この「記事」には、ビシガ地区でレストランとボッチェ(重い球を転がして遊ぶイタリア起源のゲーム)場を併設した商店を営むピエノット一家の商売の発展の様子が描かれている。「奴隷解放通り」という象徴的な名前がつけられた通りでピエノット夫妻が開いた小さな店は、早朝から深夜までカウンターを離れない夫ナタレと、台所とボッチェ場で汗だくになって働く妻ビアンカによって拡大され、南アメリカ仏伊銀行の彼らの通帳は膨らむ一方である。とどまるところを知らない夫婦の欲望の次の狙いは向かいの菓子店「パイヴァ・コウセイロ」を

手に入れることで、店主のポルトガル人が買い込んだ玉ねぎの投機で失敗して店を手放す機会を常にうかがっている。まだ幼い子供を抱いたポルトガル人の身重の妻とその店先に山積みになされた玉ねぎを見るのは、ナタレにとってこの上ない悦びであり、卸委員会のムラト（白人と黒人の混血）、ジョゼ・エスピリダオンを抱き込み、玉ねぎの値段について情報を得ながら、菓子店の値踏みをする日々を送っている。「記事」は、ビアンカ夫人がベッドで眠る息子のディノと、壁にかけられた幼子イエスを抱くパドアの聖アントニオ像を代わる代わる見つめた後、パウリスタ大通りのもっとも高価な屋敷で暮らす自分を夢見ながら眠りにつくという場面で終わる。

この「記事」に描かれているのは、勤勉な仕事ぶりだけでなく、まさに生き馬の目を抜くやり方で経済的な発展と社会的な上昇をなしとげようとするイタリア移民の姿である。進歩、発展を意味する店の名前「プログレス」は、より大きな成功を得るため、周囲の人たちを利用し、出し抜こうとする夫婦の野心を示している。ピエノット夫婦が信仰する聖アントニオがポルトガルのリスボン出身であることを考えると、彼らのさらなる成功の踏み台になるのがポルトガル人であるのはグロテスクでコミカルな皮肉だと言えよう。

もうひとつの短編「パートナーシップ」が伝える「記事」はバーラ・フンダ地区に住むイタリア移民サルヴァトーレ・メリに関するものである。繊維工場を所有するサルヴァトーレは自分の息子とサンパウロの伝統的な一家の娘との結婚をとおして事業を拡大しようとしている。「記事」は、「私の娘はカルカマーノの息子なんかと結婚したりしないからね！」という娘の母親の印象的な叫び声ではじまる。その言葉に涙ぐみ、ドアを強く閉め、部屋にとじこもる娘のテレザ・リタ。カルカマーノ(carcamano)とは「手をかける」という意味をもつブラジル生まれのポルトガル語で、当時ブラジルに住んでいたイタリア人を嘲笑したり侮蔑したりして呼ぶときに使われていた。一般に信じられているその語源は、小さな商いを営むイタリア移民が量り売りをする際、商品が乗った皿にこっそり手をかけてその重量をごまかし、不当に利益を増やしていたことからきたというものである。家柄のよさを誇りとする

ジョゼ・ボニファシオ・デ・マツス・エ・アルーダとその妻にとって、自分たちの娘がいかがわしい出自の移民の息子と結婚するなど、考えるだけでも耐え難いことであった。サルヴァトーレの息子アドリアノは街で自分を見かけたテレザ・リタの母親が顔をそむけたことを恋人に訴える。

メリ家の経済力は父親のサルヴァトーレと息子のアドリアノが身につける高級な衣服や帽子、ふたりがそれぞれ所有する車によって示される。ぴかぴかに磨かれた真っ赤な車を駆って、決まった時間にテレザ・リタの家の前を通るアドリアノの目的は、クラクションを合図にベランダへ出て来る恋人との逢瀬である。自動車が鳴らすクラクションはメリ家のぜいたくな暮らしぶりを誇示するコードのひとつとして機能すると同時に、機械文明の象徴でもあり、「近代芸術週間」開催直後、マリオ・デ・アンドラーデらによって創刊された「モダン・アートの月刊誌」(“mensário de arte moderna”)『クラクション』(Klaxon)を想起させる。

一方、マツス・エ・アルーダ家の財力は父親同士の会話から明らかにされる。ある日、息子の恋人の家のドアをたたいたサルヴァトーレは、イタリア語交じりの「マカロニ・ポルトガル語」で家長のジョゼ・ボニファシオに共同経営の話を持ちかける。サルヴァトーレは、自分の工場に隣接する空き地を区画した後、工場で働く労働者たちに売りはらうことで利益を得ようともくろんでいた。そのための資金をサルヴァトーレが、土地をジョゼ・ボニファシオが提供するというのが共同経営の中身である。その土地はジョゼ・ボニファシオが遺産として相続したものの、無為無策のまま放っておいたものであった。共同経営によって得られた利益は折半するという話を聞くやいなや、あれほど見下し、嫌っていた娘の恋人の父親は、ジョゼ・ボニファシオの目に「資本」の権化となって映し出される。三人称の語り手によって客観的に描かれていたサルヴァトーレの一挙一動は、途中から「資本は葉巻に火をつけた」、「資本は立ち上がった」(強調は筆者)と、ジョゼ・ボニファシオの視点を交錯させたものになっている。

サルヴァトーレは、体面をおもんばかって即答を避けるジョゼ・ボニファ

シオの家を立ち去る際、息子のアドリアノが共同経営の支配人になることを付け加え、自分の提案についてよく考えるよう言い含めるのを忘れない。そうしてしばらくすると共同経営の話はまとまり、両家の子供たちの結婚式の招待状が配達されることになるのである。そして、以下の皮肉に満ちた文章がこの「記事」を締めくくる。

婚約式のお茶会でメリ氏は、すべての人々を前にして、息子の将来の妻の母親に良き時代のことを思い出させた。ほとんどいつもつけ払いで、しかも記帳もせずに、彼女に玉ねぎとジャガイモ、ルッカのオリーブ油、ポルトガル産のタラを売っていたあの時代のことを。(Machado 1994: 78)

この語りからは、サンパウロで成功したイタリア移民サルヴァトーレの自負心がにじみ出てくる。ジョゼ・ボニファシオを「先生」と呼び、低姿勢で接するサルヴァトーレは、たとえ社会的身分は低くても、経済的には自分たちの方が優位にあることを強く意識している。そして、自分の息子とジョゼ・ボニファシオの娘との結婚によって、ついに彼は社会的身分をも手に入れるのである。

この「記事」は、気位は高いが、先祖代々引き継いだ財産をあてに何もせず、衰退の一途をたどるブラジルの伝統的な有産階級と、勤勉だけでなく、自分の利益になることには抜け目がなく、わずかな労力も惜しまない移民たちが形成しつつあった新興階級の対照的な姿を浮かび上がらせている。それはサンパウロ市に住む人々が日常的に目にしていた典型的な構図であり、マリオ・デ・アンドラーデをはじめ、サンパウロの多くの作家たちによって取り上げられたテーマでもあった。

アルカンタラ・マシャードは、先にも触れた「社説」と題した序文で、イタリア移民が「カルカマーノ、鉛の足、水虫野郎、誰がお前にブラジル娘を嫁になんてやるものか」とはやしたてられながら、何も言わず、適応し、働き、同化し、繁栄した、と書いている。ここで「適応し」、「同化し」という

言葉が示すように、『ブラス、ビシガ、バーラ・フンダ』の世界は、ステレオタイプ的なイタリア移民とブラジル人を単純な対立関係において描いたものではないし、ましてやブラジルの土地が移民によって占有される不安を表したものでない。アルカンタラ・マシャードにとってイタリア移民は、「悲しい」ブラジル民族に陽気な血を注ぎ入れ、停滞したブラジル社会と経済を活性化させる新しい構成員であった。なぜなら、ジョゼ・ボニファシオの一家と婚姻関係を結ぶことでイタリア移民のサルヴァトーレが社会的地位を手に入れるとしたら、ジョゼ・ボニファシオ一家は経済的安定を手に入れるではないか。

作家は「社説」の最後に、著名なイタリア系ブラジル人の文学者、美術家、政治家、スポーツマンなどの名前をあげ、「彼ら全員が、この瞬間、サンパウロの精神生活と物質生活を活気づけ、すばらしいものになっている人々のなかで肩を並べている」と敬意を表し、『ブラス、ビシガ、バーラ・フンダ』は風刺ではない」と断言する。そこにあるのは、移民たちがサンパウロ市にもたらした新しい言語や文化、生活習慣、感性と、それらに触れて変化していくサンパウロ市と住民の様相を書きとめようとする作家のジャーナリスト的好奇心と物語の語り手としての創作意欲である。このふたつが一緒になったことで、『ブラス、ビシガ、バーラ・フンダ』はサンパウロ市で暮らす「イタリア系ブラジル人」に関する躍動感と生活感にあふれた「記事」になり得ていると言えよう。

おわりに

本論で筆者が試みたのは、ブラジルのモダニズム文学にサンパウロ市という場所と移民という社会グループから光をあてることであった。それはヨーロッパ前衛芸術の影響を大きく受けていたとはいえ、19世紀末から20世紀初頭にかけて大きく変動する自分たちの社会をよりよく理解し、新しい時

代にふさわしい新しい方法で表現したいと願うサンパウロの若い詩人や作家たちの強い意志がさまざまな衝突や失敗、挫折を経て、結実したものであった。ヨーロッパ前衛芸術にならい、古い価値観や美意識を否定して、表現の革新をめざそうとしたブラジルのモダニズム運動は、1922年、サンパウロ市立劇場で開催された「近代芸術週間」で新しいブラジル芸術の夜明けを高らかに宣言すると、次第にナショナリズム的傾向を帯びていくようになる。そして、詩人、作家たちは、創作をとおしてブラジル民族と文化を定義しようと模索するようになる。このようなモダニズム運動の誕生と展開、そこで作られた作品を理解するには、場所としてのサンパウロ市の物理的、精神的状況と、サンパウロの経済発展を支えていた社会グループとしての移民の存在について考慮することが不可欠であるとの認識にたって考察を進めていった。

第1章ではコーヒー産業の繁栄を背景に、急成長のただ中にあり、世界、国内各地から様々な情報や物資、人が流れ込んでいたサンパウロ市の活気と興奮について、当時サンパウロを訪れたフランスの詩人とリオ出身の詩人の証言をまじえながら概観した。つづく第2章では、マリオ・デ・アンドラーデの『愛するという自動詞』と『マクナイマ』、アントニオ・デ・アルカンタラ・マシャードの『ブラス、ビシガ、バーラ・フンダ』をとりあげ、作品に描かれたサンパウロの移民たちの表象に焦点をあて考察した。そうして見えてきたのは、作家によって移民を見る視点は異なるものの、サンパウロ市という場所と移民という社会グループが作家たちのインスピレーションを刺激し、創作のライトモチーフとなり、サンパウロの代表的なモダニズム小説の誕生を促したということである。

[注]

¹ 本論文での引用はすべてポルトガル語文献からのものであり、筆者が原文から訳したものである。

² モダニズム詩人マリオ・デ・アンドラーデは、サンパウロの『商業新聞』(*Jornal do Commercio*)に1921年8月2日から12月19日にわたって「過去の巨匠たち」(“*Mestres do passado*”)と題した七つの論説を発表し、当時人気があった高踏派の詩人たちに敬意を表し、一定の評価を与えつつも、彼らの作品がすでに過去の遺物であることを説いた。

³ ブラジル文学を代表する作家には、オズワルド・デ・アンドラーデとマリオ・デ・アンドラーデのほかにも、アンドラーデ姓の作家が複数存在するため、上記のふたりを指すときにはそれぞれオズワルド、マリオとファースト・ネームで呼ぶのが慣わしになっている。そこで本論文でもその慣習にしたがう。なお、これらの作家に親族関係はない。

⁴ 作家モンテイロ・ロバートは、1917年12月にサンパウロ市で開かれたイタリア系ブラジル人画家アニタ・マウファッティの展覧会を見に行き、有力紙『オ・エスタド・デ・サンパウロ』(*o Estado de São Paulo*)紙上で「パラノイアかペテンか」と批判した。この若い画家の作品の多くは、留学先のベルリンの美術学校で洗礼を受けた表現主義の影響を強く映し出したものであった。ロバートは、芸術家を2種類のタイプに分け、ひとつは物事を自然に見つめ、その結果純粋な芸術をなすタイプ、もうひとつは物事をアブノーマルな見方で観察し、反抗的な学派の見当違いな提案のもと、一時的な理論に照らして解釈するタイプである、後者のような作品を生み出す画家は頭がおかしいか、人を煙に巻こうとするペテン師に違いはない、と激しく攻撃した。このエピソードはブラジル芸術におけるアカデミズムとモダニズムの価値観の衝突を象徴する出来事として歴史に残るものとなっている。

⁵ 本論文における歴史的事実に関する記述については、主に、参考文献にあげたボリス・ファウスト、リチャード・M・モース、E・ブラッドフォード・バーンズ(E. Bradford Burns)の歴史書に依拠している。

⁶ 筆者が参考になっているサンドラールの著書 (*Etc..., etc... (Um livro 100% brasileiro)*) は、1960年から65年にわたってパリで刊行された彼の全集(全8巻)から抜き出されたブラジルに関する文章がポルトガル語に訳され、1冊の本としてブラジルで出版されたものである。

⁷ 「パウ・ブラジル (ブラジルボク)」は赤い染料がとれる木のことで、ブラジル

の国名の由来となった。この木が1500年の「発見」以降のブラジル史上はじめて海外へ出ていった産物であったことから、ブラジルの詩を創作し、「輸出」することを唱えたオズワルドがその主張のシンボルとして使った。

⁸ 拙稿「マリオ・デ・アンドラーデー楽観と悲観のあいだで」pp.45-49を参照。

⁹ アントニオ・デ・アルカンタラ・マシャードの人生に関する記述については、フランシスコ・デ・アシス・バルボーザ(Francisco de Assis Barbosa)の文献に依拠している。

[参考文献]

平田恵津子「マリオ・デ・アンドラーデー楽観と悲観のあいだで」、『ブラジル研究』（大阪外国語大学ブラジル研究会、2006年）所収、pp. 29-54。

Andrade, Mário de. *Amar, verbo intransitivo*. Belo Horizonte: Itatiaia, 1986.

_____. *Macunaíma, o herói sem nenhum caráter*. Belo Horizonte: Villa Rica, 1991.

_____. “Mestres do passado.” In: *História do modernismo brasileiro: antecedentes da Semana de Arte Moderna*. Mário da Silva Brito. Rio de Janeiro: Civilização Brasileira, 1997.

Andrade, Oswald de. *Do pau-brasil à antropofagia e às utopias*. Rio de Janeiro: Civilização Brasileira, 1978.

Barbosa, Francisco de Assis. “Nota sobre Antônio de Alcântara Machado.” In: *Novelas Paulistas*. Antônio de Alcântara Machado. Rio de Janeiro – Belo Horizonte: Garnier, 1994.

Boaventura, Maria Eugenia (org). 22 por 22: *A Semana de Arte Moderna vista pelos seus contemporâneos*. São Paulo: Edusp, 2000.

Bosi, Alfredo. *História Concisa da Literatura Brasileira*. São Paulo: Cultrix, 1997.

Brito, Mário da Silva. *História do modernismo brasileiro: antecedentes da Semana de Arte Moderna*. Rio de Janeiro: Civilização Brasileira, 1997.

Burns, E. Bradford. *A history of Brazil*. New York: Columbia University Press, 1993.

Cândido, Antônio. *Iniciação à literatura brasileira: resumo para principiantes*. São Paulo: Humanitas, 1999.

_____. e José Aderaldo Castello. *Presença da Literatura Brasileira: História e Antologia*. Vol. 2. Rio de Janeiro: Nertrand Brasil., 1997.

Carvalho, Ronald de. *Pequena História da Literatura Brasileira*. Rio de Janeiro: F. Briguiet & Cia, 1935.

Cendrars, Blaise. *Etc..., etc... (Um livro 100% brasileiro)*. São Paulo: Perspectiva, 1976.

Fausto, Boris. *História do Brasil*. São Paulo: Edusp: Fundação do Desenvolvimento da Educação, 1998.

Helena, Lucia. *Modernismo brasileiro e vanguarda*. São Paulo: Ática, 2000.

Hollanda, Heloísa Buarque de. *Macunaíma: da literatura ao cinema*. Rio de Janeiro: Aeroplano, 2002.

Lobato, Monteiro. "Paranóia ou mistificação." In: *História do modernismo brasileiro: antecedentes da Semana de Arte Moderna*. Mário da Silva Brito. Rio de Janeiro: Civilização Brasileira, 1997, pp. 46-50.

Lopez, Telê Porto Ancona. *Macunaíma: a margem e o texto*. São Paulo: HUCITEC, Secretaria de Cultura, Esportes e Turismo, 1974.

Machado, António de Alcântara. *Brás, Bexiga e Barra Funda: notícias de São Paulo*. Belo Horizonte – Rio de Janeiro: Villa Rica, s/d.

_____. *Novelas paulistanas*. Rio de Janeiro – Belo Horizonte: Garnier, 1994.

Morse, Richard M. *Formação histórica de São Paulo (de comunidade à metrópole)*. São Paulo: Difusão Européia do Livro, 1970.

Prado, Paulo. *Retratos do Brasil*. São Paulo: Companhia das Letras, 1997.

Rezende, Neide. *A Semana de Arte Moderna*. São Paulo: Ática, 1993.

Sousa, Gilda de Melo e. *O tupi e o alcaide: uma interpretação de Macunaíma*. São Paulo: Duas Cidades, 1979.

Telles, Gilberto Mendonça. *Vanguarda européia e modernismo brasileiro*. São Paulo: Vozes, 1992.